

2つの「変革」がシンクロする 介護紙芝居!

†
遠山昭雄

紙芝居と老人ケアの不思議な関係

「紙芝居」は不思議なメディアである。書籍のようであるが、ほとんどの書店には置いていない。手に入れて、絵を見て筋書きをひとりで読んでも味気ない。演じる人とその語りに反応する観客がいて、完成するものなのだ。さらに、観客もひとりではなく、集団でなければならない。同じようなメディアに絵本があるが、絵本と決定的に違うのは、この集団の前で演じるということだろう（「絵本の読み聞かせ」もあるが、基本的に絵本はひとりで見るものと考えたい）。キーワードは“集団”である。

老人ケアの世界においても“集団”は重要な意味をもつ。常に不安の中にいる認知症の人にとって「集団で居る」ことの意味は大きい。集団の中で自分の居場所があることが大きな安心感をもたらすからであるが、紙芝居が「集団」をキーワードにして、ケアの世界とつながっていたことは、私にとって驚きであった。

別の側面から紙芝居に思いを巡らすと「街頭紙芝居」が浮かんでくる。「街頭」ものをリアルタイムで経験したのは団塊世代以上になるから「高齢」世代ということになる。この世代の人たちにとって紙芝居とは、それ自体がなつかしいノスタルジーに包まれたものであろう。

「集団」と「高齢」でイメージされるものは

?……、そう介護施設! である。紙芝居を演るにもっともふさわしい場は介護施設である。とは、私の勝手に強引な解釈であり、主張である。

紙芝居はオールマイティ!

さて、私が紙芝居を始めてから16年経った。働いていた老健施設で、1か月に5、6回まわってくるレクリエーション担当のたびに（飽きもせず、メゲもせず）、紙芝居を演ってきた。当時、紙芝居は、圧倒的に子ども向けのものが多く、演目探しに苦労した。そして、高齢者向けの作品が少ないことへの不満が、のちの「高齢者向き介護紙芝居」作品の監修、出版へと結びついた。

お年寄りが喜んで観てくれる作品を求めて図書館通いをしたり、紙芝居イベントに可能な限り参加したり、関連図書を読み漁るうちに、紙芝居（＝印刷紙芝居）の概観を得ることができたが、さらに、演目探しを通して、戦後の「教育紙芝居」というくくりで出版された膨大な作品群にふれ、紙芝居の世界の広大なひろがりを経験することもできた。私の紙芝居経験はまだまだ浅いが、紙芝居の世界を築いた人たちの歴史は深々としてあり、「介護」を離れた視点で紙芝居を見直す契機にもなった。そして、そのことが介護施設で始めた紙芝居についての認識を新たにすることにもなったのである。

それは、紙芝居自体の枠組みが「遊びリテーシ



ョン」そのものの広さであり、演目作品を探す・選ぶという行為が、通常のレクメニューを探し・選ぶに等しいということである。「レクリエーションの時間はいつも紙芝居」と考えて困らないくらい「作品」の数は膨大であり、さらに、遊びリレーション全体を包括できるくらいに紙芝居の幅と奥行きは深いのだ。

通常、介護施設でレク担当になった介護職を悩ませるのは、その都度のレクメニューをどうしようかということであろう。さらに、種目によって必要となる道具やレク材を調達したり、つくったりする手間も悩みの種である。だが、レクは紙芝居！と決めてしまえば、この道具を調達するという段階は一気に解決する。演じるために必要な道具は舞台だけだからだ。問題は演じる作品を何にするのかの選択と決定ということになる。

紙芝居を演じる場

作品の選択を考えるうえで、おさえておかなければいけないことがある。この紙芝居を演じる

「場」である。私は、老健在職中「認知症」フロア配属が長かったし苦労したので、まずこんなことから考え始めていた。

周囲のものや人の意味を失い、自己との関係を見失っていくなかで「安定した関係」とは意味ある世界、あるいは、意味のわかる世界をつくり出していくことである。

(竹内孝仁『介護基礎学』医歯薬出版)

私は、レク場面だけにこだわらず、介護職が施設に存在することのふるまいの意味を示唆することの認識を「場」の基礎としようと思った。



介護基礎学

著者：竹内孝仁
発行：医歯薬出版
定価：2,200円＋税

竹内氏はさらに、「認知症」老人とコミュニケーションをとるうえでのポイントを鮮やかに示している。

会話を通じて自分にとっての相手の意味（自分と相手との関係）を知る。コミュニケーションが環境としての人の意味と関係を正しくつくりあげるのは、まず第一に媒介となる「話題」の選択がなければならない。それは会話の両者にとって共通のものでなければならないが、普通はケアする人が、周囲の人々が痴呆性老人との間に会話が成立するような話題づくりということが必要になってくる。（前掲）

まず、「話題の選択」。相手に関心を示す話題を選ぶことが肝要だ。そして、「話題」に関心を示してもらうための工夫として「理解しやすい、丁寧な言葉のやりとり」があり、さらに、老人が若かった頃の鮮明な記憶として残っている世界を介護職が知ることが必要だというのである。つまり、紙芝居にかぎらず、レクリエーション全般、さらには介護のあらゆる場が老人（特に認知症老人）にとって、接する人の意味と関係を再発見する手助けになっていることが必要だということだ。

紙芝居を選ぶ・演じる

結果的に「よいことが起こる！」のだが、紙芝居は他のレクメニューよりも格段に煩雑である。

まず、図書館に行って紙芝居作品を借りてくる。このとき、なぜその作品を選んだのか、基準が問われている。竹内氏の言う「話題の選択」に焦点があたるからだ。「会話が成立する共通のもの」に接近しているかが問われる。

本番前の紙芝居を演じるうえでもっとも大切に孤独な作業「下読み」を繰り返す。この作業で作品の内容を深く理解する必要に迫られる。作品の作者である脚本家や画家の想い・願いをくみ取

り、作品に表現された物語や絵の内容を通じてどう観客であるお年寄りとコミュニケーションをとることができるのかを模索し、シミュレーションする過程である。この過程を苦痛でめんどうと感じるか、逆に楽しいと感じるかが大きな分岐点となる。

相対的に若い演じ手が、観客の老人との間に「共通の話題」を発見する作業は、若い人が老人の過去の時代や社会に降りていく過程ともいえるだろう。知らなかったことを知る、発見する喜びとなる。「共通」する話題から観客の想起する課題を支援しようと準備することが楽しくないはずがない。

冒頭で述べたように、紙芝居を「準備」する行為は、それ自体が演じる者により効果をもたらすことが多いと思う。たとえば、私はこの過程で児童文学領域の作家、新美南吉や斉藤隆介などと出会うことができた（還暦を過ぎたイイ男が今頃新美南吉か!? と笑われるかもしれないが……）。

介護施設ならではの工夫

実は、紙芝居にはその先に「演じる」という難関が待っている。どんなにいい作品に出合えても、演じ方次第でその作品のよさが発揮できないということが起こるのだ。そこがまた紙芝居の「奥の深さ」なのである。紙に描かれた絵が芝居をするのだから、「絵芝居」と呼ぶべきだともいわれる紙芝居。向かって右から左へ引き抜かれていく画面は、描かれた絵が動き出すための手法でもある。

介護現場で演じる紙芝居は、日本のある時代には、紙芝居が子どもの文化の中心だったことを体験した記憶を抱える高齢者の前で演じる紙芝居である。「演者の語りと観客の反応によって完成品となる」紙芝居だが、いかに熱を込めて演じても終わったあとに観客を見渡せば、居眠り老人の海！ だったりするのもまた、現実である。

そこで、居眠りをさせないための工夫として、「観客参加型」（通称：参加型）形式の作品を多く演じることになる。これらは、物語性・ストーリー性の強い「物語＝完結型」の作品群とは対極をなすもので、「観客の自由な発言」を許容・受容することを前提に、演じ手の呼びかけに对应して一斉に「かけ声」を發してもらい、質問への「返答」（あてっこ紙芝居形式のもの）、観客の自由な感想と疑問、観客間のつぶやき・ひそひそ声などに演じ手が反応するなど、さまざまなやりとりを誘發するための試みである。

もともと街頭紙芝居の系譜は、演じ手のアドリブ、観客とのかけ合いが「演劇としての紙芝居」を成立させていた。紙芝居は演じ手の語りによる大胆な「読み替え」と観客の「読み込み」（鈴木常勝『メディアとしての紙芝居』久山社刊）が最大限生かされる場を創り出していたのだ。

紙芝居がレクを変える レクがケアを変える

介護施設でのレクメニューを考えるうえで、紙芝居を演じる意味が投げかける問いは大きい。私は「認知症に効く紙芝居はありませんか？ なければつくってください」と紙芝居作家の人たちに提案して笑われたものだ。それくらい認知症と紙芝居は結びつかないものだった。もちろん「効く」は「治る」ではない。「認知症」に対応できる“文化”が紙芝居にはあると信じたいのだ。

一昔前の「寝たきり」予防をテーマにした身体



運動機能回復型に偏りがちな種目から、この国固有の“文化”をベースにしたコミュニケーションツールを活用した接近方法にシフトすることで、“ケア”に厚みを増していけるのではないかと、私は考えている。落語、講談、浪曲などの伝統的な話芸、ストーリーテリング、^{すばなし}素話など、さまざまなパフォーマンスが横断的に結合することで、薬物にたよらない、医療とは違った抵抗軸をかたちづくることのできるのではないだろうか。

高齢者の青春時代を呼び起こす記憶再生装置として紙芝居を活用する道は、介護現場でアクティビティを通じたケアの方法として、今後さらに深まりを増していくに違いない。そこに微力ながら参加できれば紙芝居をしつこく演り続けた甲斐があるというものである。🌸